

# 公務員進化論(5)

## 「ブログ、読書、交流」の連携で進化しよう

久繁哲之介  
地域再生プランナー

### ブログを自己啓発に活かす

ブログを自発的に書いている方、職場で書かされている方、これから書き始める方に向けて「ブログを自己啓発に活かす」ノウハウを示します。ノウハウを要約すると「ブログ、読書、交流」の連携です。

自己啓発は大きく分けると、次の三つの手段に分類できます。

- |                 |     |     |
|-----------------|-----|-----|
| ① 自分の体験・情報発信で学ぶ | ブログ | 代表例 |
| ② 本・資料から「読んで」学ぶ | 読書  |     |
| ③ 他人から「聞いて」学ぶ   | 交流  |     |

後ろの手法ほど「他人に依存する受動的」手段なので、簡単かつ安価だと思われがちです。しかし、「良書や人と出会い、そこから価値を得て、他人の体験を咀嚼して体得」に至るプロセスは、実は難しいものです。そういう自覚がなくて、手

つとり早く他人に「成功する方法だけ教えて」と言う人が少なくありません。

一方、ブログなど「自発的」な体験・情報発信は体得度が高くて早いです。さらに出版など思いがけない成功を手に入れる可能性もあるのに、実践する方は少ないのです。

### 休日の自己啓発が業務成果に直結

私の専門である「まちづくり、地域再生、商店街活性化」を担当する自治体職員の業務にも、自己啓発と全く同じ傾向が見られます。

講演会や視察など「受動的な学習」は誰もが気軽に参加します。その受動的学習では「成功事例と、成功への手段」だけを知りたいがる人が非常に多いです。

しかし、他地域の体験を咀嚼して体得できる自治体職員はほとんどいません。新たな事を「自発的」に起こせる職員はさらに少ないのです。

まちづくりの数少ない成功事例は必ず、新たな事を「自発的」に起こしながら「受動的」な学習

要素も取り入れて進化しています。

すなわち、先に示した三つの手段を結び付けて成長・成功しています。この真実に気がつかないほとんどの自治体職員および地域は今もなお、後ろ二つの手段（受動的な学習）だけに依存した「他地域の上辺を模倣する」まちづくりで結果を出せていません。

このように「ひたすら業務に成功を求めるが、成功できない自治体職員、活性化できない地域」を見続けていると、「正しい自己啓発の習得」から始めるべきと痛感し、次の素朴な疑問が湧きま

す。  
自治体職員は、休日など勤務時間外の自己啓発にどれだけ時間・お金を投資しているのでしょうか？

### 久繁哲之介の自己啓発は連携が基本

私事で恐縮ですが、本は毎年200冊以上読んでいます。その過程で「本を読む受動的な学習」

だけでは進化できないと身をもって体験しています。読者の中にも「読みっぱなしの読書家」がいるかもしれません。経験者として助言します。この「受動的な方法、姿勢」は投資対効果が非常に低いのです。投資対効果の意識を業務にはもちろん、自己啓発にも適用するとよいでしょう。

私は投資対効果を意識して試行錯誤しながら、現在の自己啓発ノウハウに辿り着いています。私のノウハウが最善とは思っていませんが、読者の参考になればと願い解説を加えて紹介します。

私の自己啓発ノウハウのキーワードは「連携」です。すなわち、三つの自己啓発手段「ブログ（情報発信）、読書（情報収集）、交流」を連携させることが私のノウハウで一番重要な視点です。連携を自己啓発の基本に据えるメリットを二つ指摘します。

①連携という言葉は多用するが、自身は連携できない公務員が「連携」のノウハウを習得する契機になる

②交流会で交換した名刺の数だけ人脈ができた  
と満足・誤解する人がいるが、ブログ更新・読書・交流で重要なのは「数の多さ」ではなく「連携」と分かる

参考までに、私のブログ「久繁哲之介の地域力向上塾」(<http://nisa21k.blog.fc2.com/>)も更新頻度は多くありません。読者の皆さん、数は気

にしないで気軽に、だけど連携は気にしてブログや交流に取り組みましょう。

読書も連携は重要です。読書論や交流（人脈）ノウハウ本など各分野を極める良書は巷にあふれています。しかし、その各分野に特化した「専門書」だけを読んで、成長・成功したという話ほとんど聞いたことがありません。その最大の理由は「他分野と連携させていない」からです。

自治体の業務も、自治体職員の自己啓発も、専門分野あるいは簡単な手段に偏り過ぎる傾向が見られます。「ブログ、読書、交流」の連携は、この弊害を打破する突破口になるでしょう。

「ブログ、読書、交流」を連携させると「自発信と受動性（情報の発信と受信）、ネットとリアル、1次情報と2次情報、論理と感性」のバランスを確保できます。偏りを排除する結果、ものを見る視点が深く・広くなります。その効果をイメージできるエピソードから話を始めます。

### 被災地で写真を撮りたがる国会議員

某地方都市で講演した後、親睦パーティーが開かれました。主役は、講演した私ではなく、地元選出の某国会議員（以下、X氏と言う）でした。

パーティーは、X氏の講話で始まり、乾杯後はX氏の周りに人だかりができました。ある方が「X先生、東日本大震災の被災地には行かれましたか？」と聞くと、X氏は「待ってました！」という笑みを浮かべて胸元から携帯電話を取り出し、

被災地で撮影した写真を自慢げに（誰も見たいとは言っていないのに）見せ始めました。X氏の行動を見た私は、以前読んでいた次の本に思いを馳せました。

岩手県陸前高田市の戸羽太市長の著書「被災地の本当の話をしよう」陸前高田市長が綴るあの日とこれから（ワニブックス）の85〜87頁の以下部分、国会議員の行動を目の当たりにして、腑に落ちたのです。

（陸前高田には、管直人首相をはじめとして、多くの政治家たちが視察にやってきました。（中略）しかし、明らかに「点数稼ぎ」や「物見遊山」でやってくる人も少なくありません。ある日、市長室で公務にあたっていると、「市長、東京からお客様です。玄関までお越し頂けますか？」という内線が入りました。玄関へと向かうと、そこにはとある国会議員がいました。「なんでしょか」

「市長、ここで写真を撮ろう」その方は被害状況や復興の進捗など一言も聞かず、市役所の看板が入る所で私のツーショット写真を撮ると、そのまままっすぐ帰ってしまいました。（中略）

もつと酷い方もいました。私が被災地をご案内したのですが、多くの犠牲者を出し、今では廃墟状態になっている旧市庁舎に来ると、「ここで写真を撮りたい」と言いだし、次の瞬間、信じられないことにVサインをしながら写真に収まっているではありませんか！この市庁舎でも大きな被害

があったことは説明済み、なのでです。さらに「さあ、市長も一緒に！」とVサインを出したまま、私を手招きしましたが、さすがに丁寧に断りさせて頂きました。表面上は平静に対応しましたが、心の中では「この人には人間の心があるのか」と憤慨しました。こんな人に「頑張ってくれたまえ」と言われても……困ってしまいます。(傍線強調は筆者)

## 「ブログ、読書、交流」の連携効果

実は私が本書を読んだ時には、「国会議員が被災地に『点数稼ぎ』のために来て写真を撮る」という戸羽市長の真意が理解できませんでした。なぜなら「多くの方が被災した場所で写真を撮る行為」は、私の常識では「点数(評価)を落とす」解釈しかできないからです。同じ行為が国会議員にとつては、正反対の評価、すなわち「点数稼ぎ」になるとは、私には想像すらできませんでした。

読書では想像すらできなかった「自分とは正反対の常識・価値観」が、X氏とのリアルな交流を通して「私の肌感覚」として、やっと理解できたのです。

読書と交流を結び付けることで「私と国会議員では(善悪は置くとして)価値観・常識が正反対」であるという「気づき」を得ることができました。しかし、この仮説は「視点の狭さ・浅さ」を感じます。

そこで、もう一つ結び付ける対象を自分の「ブログ(情報発信)」から探してみます。私は戸羽市長の著書を読む前、ブログで「国会議員は100人に削減しよう!」とつぶっていました。その理由は、国会議員も地方議員も人数が多過ぎるからです。それ故に、存在価値の薄い議員が「自分の存在価値を誇示する(点数稼ぎの)パフォーマンス」のために、多くの税金と時間が浪費されているのです。

以上三つの手段「ブログ、読書、交流」を結び付けると、次の仮説を導くことができます。

存在価値の薄い議員は、想像している以上に多く、彼らは「自分の存在価値を誇示する(点数稼ぎの)パフォーマンス」材料に飢えています。今、マスコミと地元支援者の最大関心事は「被災地の支援、復興」です。しかし、存在価値の薄い議員の関心事は「被災地支援に関与しているように見える」パフォーマンスでしかありません。存在価値の薄い議員が「自身が被災地支援に関与しているように見える」手段は、被災地で撮影した写真を見せるしかないようです。

読者の皆さんに注目していただきたいのは、私の仮説が正しいか否かではなく「ブログ、読書、交流」の連携を深めるほど「仮説を導く視点が深く・広くなる」ことです。

## 自治体職員のブログ

「市長や幹部職員のブログ」を公式ホームページ

に併設する自治体が増えました。この「自治体幹部、ブログ」という組み合わせに、私は非常に期待しています。なぜなら、書き手が「市長や幹部職員」で、かつ内容が私的な心情をつづる「ブログ」であれば、お堅い自治体でも少しは個性的な情報発信ができるはずだからです。当事者の自治体も、それを目的に始めた取り組みのほずです。さて、実態はどうでしょうか? 人口50万人以上の某都市(以下Z市と言う)が2008年4月に開設した「Z市幹部職員ブログ」が、その実態を端的に示しています。Z市幹部職員ブログは局長クラスが持ち回りで書く「まさに幹部職員ブログ」です。

Z市幹部職員ブログ開設から3年半経過した11年10月14日のエントリーを以下に引用します。テーマは10月10日にZ市が「主催(開催)した」スポーツ祭で、書き手は「市民局長」です。なお、固有名詞部分はくと表記します。

〈市民局長のくです。体育の日に開催された「Z市スポーツ祭」に参加し、開会宣言を行いました。開会式の後、くの演技が行われました。皆さん日頃の練習の成果を発揮され、素晴らしい演技を披露されました。演技の後、くなど白熱した内容に、皆さんから大きな声援が送られました。(以後省略)〉

(傍線強調は筆者)

Z市幹部職員ブログは、私にとつて「ひとごと」なので批評はしません。しかし、もし私がZ市民という「自分ごと」の仮定で話をすれば、Z市幹部職員ブログの内容と表現は非常に不満です。理由は作者の「視点が市民感覚とは程遠く、浅く・狭い」からです。この視点はZ市幹部職員ブログに限らず、ほとんどの自治体の計画書やブログに見られます。視点の現状と、改善方向を示します。

①傍観者のような「ひとごと」な視点を、「自分ごと」に改める

②表面だけを見た「抽象的」な記述を、交流と読書体験を連携して「具体的」に書く

事例文の文末は「されました」という単調な受動表現の繰り返しです。市民局長が市民行事を傍観者のような「ひとごと」として見ていることを、読者（市民）は敏感に感じとるでしょう。市民行事を「ひとごと」としか見ることができない習性が根付くと、Z市が「主催（開催）した」スポーツ祭のことまで「開催された」と、まるで「ひとごと」のような表現になってしまいます。

事例文の骨格は「手垢にまみれた抽象表現」が乱用され、具体的な表現は一切ありません。読者が知りたい情報は「日頃の練習の成果、素晴らしい演技、白熱した内容」の具体的な表現です。読者の共感や感動を呼べるか否かは、ここに集約さ

れます。スポーツ新聞はここが勝負どころで、手垢にまみれた抽象表現は絶対に使えません。この法則はスポーツ祭のブログに適用されてしかるべきです。つまり、スポーツ新聞の「読書」体験を、スポーツ祭の「ブログ」発信に活かすべきです。

手垢にまみれた抽象表現を使わないで具体的に表現するには、競技者との「交流（スポーツ新聞の場合は取材）」を通して1次情報を得る必要があります。作者の市民局長は、市民行事に「参加した」と表現していますが、おそらく競技者とは交流せず、来賓席で傍観していたのでしょう。

このように、スポーツ祭の「ブログ」執筆で読者（市民）の満足度を上げるには、競技者との「交流」と、スポーツ新聞の「読書」体験の連携が有効です。

### 作者の視点・思考が見える

Z市幹部職員ブログを読んだ市民には「作者（市民局長）の視点と思考」が、はっきりと見えまします。つまり、読者のほとんどは作者を次の①のように判断します。しかし、読者にはその見えるが事実は②の可能性も十分にありまします。

①市民局長は「ブログ」に書くテーマ（スポーツ祭）に関連する「読書、交流」の質量が足りない

②市民局長の「読書、交流」の質量は高いが、その経験が「ブログ（情報発信）」に連携・

### 活用できていない

努力量は数倍も違うのに、「他者の評価は同じ」こと、「努力量は同じなのに、結果に数倍の差が出る」ことはよくある話です。

世の中には②のタイプが少なくないのですが、とりわけ自治体職員には多く見られます。つまり、自治体職員が多くは「努力はしているのに、結果が出ないから、努力しているように見えない」損をしています。損をするのは自治体職員だけではありません。自治体施策の結果が出ないと、市民も損をします。

自治体職員が「努力はしているのに、結果が出ない」最大の理由は「連携不足」にあります。ここには自治体組織と市民など外部との「連携不足」という意味も含まれます。

### 私事と仕事の連携

この背景には、個々の自治体職員が、自分自身の行動や発想さえ連携できていないことがあります。商店街活性化を担当する自治体職員（以下、彼と言う）によく見られる事例を話します。

プライベートな時間に商店街で買い物をしたとき、無愛想な店主の接客態度に不愉快な経験をします。彼は「こんな無愛想な店主の店では、もう買いたくない」と感じまします。しかし、いざ仕

世界の動きを日本へ  
日本の声を世界へ

時事通信

事でその商店街の活性化を議論するときには、プライベートな体験が全く活かされない他都市の成功事例を模倣する計画しか思いつきません。

プライベートな私事と、役所での仕事は全く連携できていないのです。「私事と仕事」はメリハリをつける必要があります。しかし、公務員は「私事と仕事を分断」し過ぎています。一方、民間企業で結果を出す社員は「私事と仕事の連携」が非常に巧みです。

念のため補足しますが、「私事と仕事の連携」と「公私混同」は全く別物です。「ブログ、読書、交流」の連携は、私事と仕事を連携させる訓練としても有効です。

### 作者の視点・思考を読みとる

文章は「作者の視点・思考が見える」ので、「ブログ、読書、交流」の連携により、視点・思考を広げよう！と提案しました。

換言すれば、読書など文章を読むときは「作者の視点・思考を読みとる」ことが必要です。なぜなら、作者の視点や思考が「浅い、狭い、正しくない、恣意的な」情報や書籍が氾濫しているからです。

特に、アンケート調査は「恣意的」なものが多いため、「作者の視点・思考を読みとる」技術が欠かせません。ケーススタディーとして、マスコミが頻繁に報道して流行語にもなった「草食男子」を取り上げます。

### 「草食男子」の正体

11年1月13日の全国紙は、まるで各紙が申し合わせたように「草食男子が倍増」という同じ見出しが並びました。これは、お役所（厚生労働省）がプレス公表した調査結果を新聞社が分析も批判もせず、そのまま垂れ流す「世論づくり」の一例です。

厚生労働省が調査①でマスコミに強調（プレス）した点は次の通りです。

調査①の要旨…16歳から24歳の若い男性が、セックスに無関心であるとアンケートで回答した割合が2年前の同調査に比べ倍増した。これは少子化に直結する問題で、少子化対策は急務だ。

少子化対策が急務という「世論」を先につくり、その後の少子化対策事業予算を獲得しやすくする戦略（下心）がミエミエです。

問題にすべきは、新聞社が役所のミエミエな下心をわかっているにもかかわらず、分析も批判もせず、役所の意図通り報道することです。

マスコミの使命を私が担ってみましょう。調査①と類似する調査を探します。すると、厚生省から委託された日本家族計画協会が、以前に似た調査②を実施している実態が浮かび上がりました。

調査②「高校3年生のセックス体験率」調査は、次のように教育関連の予算獲得戦略に使われます。

調査②の要旨…高3男子のセックス体験率が3年で10%以上アップした。性体験低年齢化は問題であり、携帯電話の所有・使用の規制や道徳教育の復活など対策が急務だ。

以下に調査①と②のデータを紹介します。

#### 調査① セックスに関心がありますか

選択肢「とてもある」「ある程度ある」「ない」「嫌悪」のうち、「ない」「嫌悪」と回答した者の比率を08年と10年で比較すると、男子の16〜19歳、20〜24歳で倍増しています。

16〜19歳の男子	2008年↓2010年
20〜24歳の男子	17・5% ↓ 35・1%
	11・8% ↓ 21・5%

#### 調査② 東京都高3男女のセックス体験率

高3の男子	2005年↓2008年
高3の女子	35・7% ↓ 47・3%
	44・3% ↓ 46・5%

18歳前後の男子は、セックスに無関心な者の比率が倍増しているという調査①と、セックス体験率が急増しているという調査②の関係は、どのように読み解くべきでしょうか？

「どちらか一方はうそ」という視点と、「双方とも事実だが、願望と行動という表裏関係なので数値は異なって当然」という視点があります。

私の見立てでは後者です。調査①は「願望（心

情) 調査であり、調査②は「行動(事実)調査」という違いに注目します。人の「願望と行動は必ずしも一致しない」ことは、「私事と連携」させて考えてみれば納得できるはずです。

### 市民の願望と行動も一致しない

人の「願望と行動は必ずしも一致しない」ことを仕事に応用しましょう。まちづくりなど自治体計画の策定で、よく「衰退した街中に欲しい施設を市民にアンケートで問う願望調査」を行います。自治体は、市民が選択式アンケートに答えたい通りの施設を建設しますが、市民が「利用しない(行動に結び付かない)」事例が非常に多いのです。その理由は、人の「願望と行動は必ずしも一致しない」にあります。机上でアンケート結果だけを見て考えるのは非常に危険です。

では、どう対応すればよいでしょうか？ 連載5回目(1月16日号)で提案した「街を歩いて市民の行動を観察(エスノグラフィ)」の併用が有効です。

### 視点を変わると見えない老女が見える

最後にリラックスして「作者の目的を読みとる」テストをしてみましょう。写真は有名な「若い美女と老女のだまし絵」です。読者の皆さんには「若い美女の顔と老女の顔の両方」が見えますか？

これを見た多くの方が、左斜め後ろを向いた

「若い美女の顔しか見えない。どういう視点で老女の顔が見えるか分からない」と言います。若い美女しか見えない方はまず、次の二つの「固定された観念(視点)」に支配されていないか確認してください。

- ①人は首が見える(ように描かれる)はず
- ②2人の顔の大きさは同じはず

老女の顔が見える視点は、若い美女の「首とネックレス」の部分それぞれ、老女の「顎と口」に見立てることです。このように「固定された観念(視点)」を一度捨てて、別の視点から見ることでできると、若い美女の「耳と小さな顎」が、老女の「目と大きな鼻」に見えます。



若い美女と老女のだまし絵